
Way of life

覇剣士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Way of life

【Nコード】

N4719B

【作者名】

覇剣士

【あらすじ】

環境破壊、核戦争によって滅亡に向かう地球で繰り広げられる人間達の生き方を、個々の思想を、この作品で見届けてください。

第一話 1

広い荒野にはただならぬ雰囲気の流れている。

空には雲がかかり、辺りは薄暗い。

終わりが見えない平地には、数千、数万という銀の甲冑をかついだ兵士であふれていた。

兵士達の向かう先。

山の麓にある漆黒の森。

その森と平野の境目を彼等は目指していた。

そこには四つの影。

向かい来る軍勢とはあまりに相反するいでだちをした、人の影だった。

洋風と言える大軍勢に対し、着物や、ズボンに上着といった和風の4人。

右から、短身薄赤髪、長い髪を後ろで結わいている和服男。

長身薄青髪、長い髪をポニーテールで結んだ和服男。

短髪で濃青の色の髪をもつ普通な格好の男。

肩程の明るい茶色髪をもつ、眼鏡をかけた男。

威風堂々を思わせる四人は、それぞれの手に武器をもっている。誰に合図された訳でもなく。

銀の軍団は四人にむけて突進を開始した。

「オイオイ、なんだよこの数は。」
濃青髪の男は言った。

「まあ、もうすぐ目的地に着きますし…その前に僕達を消しちゃうおうって魂胆でしょう。」
眼鏡の男。

「どうでもいいかつ、オレは先行くぜ。」
濃青髪の男は、手にした深紅の槍を片手で回しながら言った。

「援護はまかせたぜえっ!!」
言い放って軍勢に突っ込んでいく青い閃光。

「そんなに前に出て、流れ弾に当たっても知りませんよ」
眼鏡男も、手にした長銃を肩にかけ、歩き出した。
残された2人の和服組。
両者とも腰に刀を携えている。

「我々に人権は無いのか…」
薄青髪の男がつぶやく。
「まったく…地球が滅びかけてるといふのだから…ほかにやることはないのか…」
薄赤髪の男に語りかける。

「……ああ……そうだな。」
薄赤髪男はポツリという。
そして2人も、軍勢に向かいなると、足速に歩き始めた。

砂埃をたてる大軍勢と四つの閃光は、荒野で激しくぶつかりあい、

平原を駆け巡った。

第一話 怪しい四人

白いレースのカーテンが光をとおして、輝いている。10畳程の自室は暖かい空気で満たされていた。

先程から目覚まし時計の音が響いてうるさい。

僕こと黒澤和佐は、布団の中でモゾモゾとうごいた。

「ん……いまなんじら……？」

寝ぼけ眼で目覚ましを止める。

時刻は7時15分。学校には全然間に合う時間だ。

「こうゆう時に御約束の寝坊でなくてよかったあ。」

あくびをしながら意味不明な事をいう。

布団からでて、学校の鞆やら制服やらをかきあつめてリビングでいる。

「おはよう。」

部屋にいた母と父にいう。

返事を聞かぬまま洗面台へ向かった。顔を洗い、リビングにもどって朝食をとる。そして制服に着替える。

いつもどりの朝だ。

「いつてきまーす。」

お決まりのセリフで家を出る。たぶん一生の中で一番多く使う言葉じゃないだろうか。

外は少し肌寒く、空は灰色の雲がかかっていた。
それを眺めながら、思考をめぐらす。

今この地球は、着々と滅亡に向かっているのだ。

始まりは21世紀後半、環境をかえりみず進んだ技術と、死の灰をまき散らした核戦争によって、この星は著しい変化をみせた。

生き物達の生態がかわり、大陸は全てが集まり一つの陸となった。

地球の寿命は数百、数十年にまでちぢんでしまい、いつ終わりを迎えてもおかしくない状況になってしまった。

人間達は愚かな行為を繰り返し、自らの生きる道を閉ざしてしまったのだ。

人々には残った時間を恐怖と不安を抱えながら過ごすしかない、そんな地獄を、罰として受ける事になった。

思考が止まる。

なぜならば、和佐はその現実が、全く身に染みていないからだ。

滅びるといっても、数百年後の事かもしれないし、そうだとしたら自分はすでに死んでいるはずだ。

それに、和佐の住む町は、戦後繁栄を取り戻した数少ない発展都市なのだ。だから町の外で起きている悲惨な現実を想像することができない。

つまり幸せ過ぎる今しか知らないのだ。

それに気付かずノウノウと暮らしている。

それが黒澤和佐という人間なのだ。

珍しく朝から脳みそを動かしたら、気持ち悪くなりそうになってきた。

学校についたら、居眠りをする気満々だからどうでもいいか。

そう思って、足速に学校に向かうのだった。

放課後。

いつもどおり、親友と一緒に町に繰り出す。

といっても、ゲーム屋を見たり、本屋に行くくらいしかやることはない。

もつと毎日刺激が欲しいと、ここのところよく思う。

都市の外に出て、もつとたくさんの事を知りたい。

でもその半面、危険なことに首を突っ込みたくないとも感じる。

そんな矛盾した日々、なんとも言えない心境を抱いているのだった。

友達と別れて、一人で町を徘徊しはじめた。

あてもなく歩いているだけ、小さい頃から探険を繰り返していて、

町の構造は知り尽くしている。

ポケットと歩いていたら突然空が反転した。なにかにつまずいて、ころんだのだ。

「いつてえ……。」

スネを押さえながら回りを見る。いつの間にか留置所に来ていた。

この町の留置所とは、悪さをした族の処罰が決まるまで、一時的に閉じ込めておくところだ。

岩場に穴を開け、鉄棒を何本も埋め込んで作られた牢屋状の部屋に、悪党をガチャン…と閉じ込めておくのだ。

何につまずいたのかと足下を見る。

牢屋の隙間から赤い棒が突き出ていた。それに足をとられたのだ。

「ハハハハハ……。」

笑い声が聞こえる。

その声をたどってみると、持ち主は檻の中に座っていた。

「足下がお留守だぜ…兄ちゃんよ。」

そいつは笑いを押し殺して言った。

座っているのは、青い短髪の若い男。服装は長ズボンに長袖の上着。手にはさつきつまずいた棒……深紅の槍が握られている。

「なななななっ……………!？」

困惑する和佐。

それに追い討ちをかける男。

「コイツにつまずいたのはお前が初めてだぜ、おバア力さん。」

突然つかかってくる何なんだこの男は…？しかもいきなり馬鹿よばわりされた。

「なにすんだよっ！！このスカタン！！」
あたふたしながら言い返す。

「威勢がいいな、俺をスカタンよばわりするたあよ。」

ニヤニヤしながら言う。

「先に馬鹿よばわりしたのはそっちだろう」

呼吸がみだれる。

「だって事実だろうが。」

真顔でいう。どこまでも腹がたつやつだ。

だが、あまり関わらない方がいいと、直感が伝えてくる。

「くっ……お前みたいなのに付き合っている暇は無いだよ。」

実は暇だったが、そう言って踵をかえした。なぜか悔しい様な気分だ。

和佐の頭に石が当たった音だった。たいして痛くは無かったが、投げる奴は一人しかない。

「……………」

ゆっくり後ろを振り向く。

檻の中で男は、和佐に向かってあっかんべーをしていた。

ブチッ

和佐の中で何かが切れた。もうムカついた。
その辺にある石を次々に、これでもかと投げ付ける。

「何しやがるこのバカアツーーーーー!!」
辺りに和佐の声が響く。

「おつとあぶねえ!! そんなピッチじゃ俺からストライクは取れねえぜっ!!」

男は槍で巧みに石を打ち返す。

そんな事をしている二人に、三つの人影が近付いてきた。

「なーにしてるんですか？まったく。」

眼鏡をかけた茶髪の男が喋りかけてきた。

「あつ、お前等何処行つてやがったっ！？」

新たに現れた3人に困惑の表情をつかべる和佐。

騒ぐ牢屋の男の頭を、押さえ付ける眼鏡の男。

後ろの2人は髪が長く、赤い髪と薄青い髪をしていた。おまけに和服なんて着ている。
見るからに怪しいだろ。

「すみませんね。僕達のツレが何か変なことでもしましたか？」

怪しいが、清々しいほど丁寧な言葉使いだ。

「そいつが喧嘩ふっかけてきやがったんだよ。」

牢屋の男が言う。

「あゝあゝなるほど…」

眼鏡はクルリと牢屋の男の方を見る。

「貴方が喧嘩をふっかけたんですねっ。」

全ておみとうしだった様だ。ギリギリと牢屋男の頭に指圧をかける。

「なっ、なんなんだよ…あんた達…。」

まったく…と言った感じに和佐がいった。

「あ、僕はクレイ。こっちの単細胞はスティンと言います。」

眼鏡の男が言った。

別に名前が聞きたかった訳じゃないんだけどね。

「誰が単細胞だ…。」

喋ったスティンにさらに指圧をかける。

「向こうのムスツとした和服組は、小さい方がえんか嬰歌、大きい方がクロウって言います。」

クレイは、傍らで、いつてえ〜とか言ってる単細胞そっちのけで話続けた。

「ム…、失敬な…我々はムスツなどしてないぞ。」
クロウはムスツといった。

「デメエも名乗ったらどうだ?。」

やっと指圧から解放されたステインがいう。

「あ…僕は…黒澤和佐…」

見ず知らずの人間に名を名乗っていいのだろうか。

「馬鹿には勿体ない名前だなっ。」

ニヤツと言ったステインの頭を、クレイが檻の鉄棒に打ち付ける。
ステインはキュウ…といって無言になった。

流石にちよつと可哀相に思える。

「この辺じゃ見ない顔ですね。何処から来たんですか？」

彼等に少し興味を持って、たずねてみた。

「オレ達はなあ……。」「

喋りかけたステインの口を、クレイがふさぐ。

「フガッ、フガフゴッ!？」

「あはっ、気にしないでください。」

そんなことされたら気になるに決まってる。

「そもそもなんでコイツは捕まってるんですか？」

檻に入っているのだから何かしら罰せられる事をしたのだろう。

コイツなら何でもやらかしそうだし。

「少年…。」

突然だった。

後ろの方にいた嬰歌が、近付いて来た。

「もう日も暮れる…そろそろ帰ったらどうだ…？」

何かと思えば時間のことか。

あまり遅くならなければ問題はない。

「別に、時間は平気だけど…。」

その時だった。

嬰歌から威圧てきな空気を感じた。
目に鋭さが現れている。

「帰れ……俺達に関わるな……。」

ゴクリと唾を飲んだ。恐怖を感じたのだ。

その感覚は普通じゃなかった。

いままでに感じたことがない。

「……………」

少し間があいた。

そこにクレイが割ってはいる。

「夜、外にいと、その単細胞みたいなのにからまれちゃいますよ。」

場を和ませる様な感じで言ったが、和佐の感じた違和感は消えなかった。

「あ……………うん、じゃあそろそろ……………」

やっとの事でその言葉が出た。

「ええ、それがいいでしょう。」

クレイの笑顔を背にその場を離れる。

だが、心に残ったさっきの感覚は、和佐の中から離れそうになかった。

「まったく、見ず知らずの少年に素性がばれて、巻き込んでしまっ
たらどうするんです?」

クレイが、檻の中にいるスティンにいう。

「自分だって、名前教えてたじゃねーかよ。」

ふてくされるスティン。

「それは……まあ……。」

やってしまった…というふうなクレイ。

「それよりはやくそこから出る方法を考えたらどうだ？」

クロウがいった。

「だってよう、クレイが壊すなって…。」

「当たり前です。」

言い切るクレイ。

「僕達はこの辺にいますから、はやくそこから出て来てくださいよ。」

言い残してゾロゾロとその場を去っていく3人。

「おいっ、置いて行くなぁっ————!!」

ステインが叫んでも、むなしく辺りに声が響くだけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4719b/>

Way of life

2010年10月10日20時05分発行